令和６年度　学校評価

１．学校評価概要　最終評価

評価基準　４：適切　　３：ほぼ適切　　２：やや不適切　　１：不適切

評価項目	自己評価	学校間評価
Ⅰ．教育理念・目標 （小項目５項目）	評価 4.0	評価 4.0
	・「2022 共通ｶﾘｷｭﾗﾑ」でアドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを定めている。令和７年３月、ディプロマポリシーを学生が自己評価した。カリキュラムポリシー、学生の自己評価結果を副学校長、教育主事協議会で評価する。 ・保護者会を令和６年４月、11 月に実施し学校の現在の状況を説明した。	・適切に運営されている。
Ⅱ．学校運営 （小項目８項目）	評価 4.0	評価 4.0
	・保護者や地域住民、同窓生への情報のため HP を年 29 回更新した。また母体病院の広報誌に年４回､教育活動を掲載した。 ・全教員が電子書籍を所有し実習指導で活用した。また会議の際にはデバイスで議事を共有し検討した。 ・機構本部の情報システム更新で情報セキュリティが強化された。	・活発な情報公開は地域からの信頼につながる。閉校後も学校の名を好印象で残すことにもつながる活動である。
Ⅲ．教育活動 （小項目 16 項目）	評価 3.9	評価 3.9
	・臨床技術演習では、事例を教員会議で検討しより実践に即した統合的な判断を要する内容とし段階的な学習課題を数か所設置した。学生はこれまでに得た知識・技術を駆使して段階的に課題を達成することで看護実践能力に必要な思考や判断力が養われた。 ・卒後の研究能力を育成するため看護研究演習では、自己の看護実践を俯瞰して振り返ることができるよう指導した。 ・学校関係者評価を今年度から５月と２月に時期を変更した。年度初めに実施したことで今年度の目標や課題が明確になり教員も教育の方向性や課題を考える機会となった。 ・経過別看護実習（急性期・回復期）、経過別看護実習（終末期）、小児看護学実習、地域・在宅看護論実習は学習が深まるよう実習環境を整えた。その結果実習評価平均点は概ね上がった。 ・実習指導者に向けて看護診断やシャドウイングについての学習会を実施した。 ・中堅看護教員・看護師長研修を１名受講、NHO の他看護学校で１年次基礎看護学科目を３年目の教員が担当した。院内研修全５回を職員全員が受講した。関東信越グループ内看護学校主催の研究授業に延べ５名が参加した。研修を受講し指導力育成など資質向上に取り組んだ。 ・研究の質を保つため副学校長が指導をした。研究の質を向上させるため図書の購入や大学教授への指導依頼ができる体制を整え、３つのグループがアドバイスを受けた。雑誌掲載１題、総合医学会で４題発表した。	・事例ごとに教員会議で検討し、教員間で指導が一貫していることが評価できる。単位認定試験の評価点数が前年を下回っているが、実習評価点、学生による実習科目評価が上回っているのは努力の成果である。 ・５月に学校関係者評価を行い教育の方向性が定まり、教員一同で教育内容をよりよくするために検討を重ねている。その成果が学習環境の整備に繋がり教育の質を向上させる要因になっている。 ・社会のニードに沿って実践的な教育方法を常にブラッシュアップしている。新規の実習場所の開拓に尽力している、新規の受け入れや学習形態の変更に戸惑う臨床への対応も適切である。 ・学会発表数など実績としての目標値を上げる余地はあるが、外部講師を依頼し、研究の質の向上を図っていることは評価できる。
Ⅳ．学修成果 （小項目５項目）	評価 3.8	評価 3.8
	・卒業生 78 名､県内就職率 91.7%､NHO 就職率 70.5%、助産科進学者５名であった。 ・３クラスに分け担任を５人にした。各クラスの担任は模擬試験結果を分析しクラスの特徴をふまえて国家試験対策を行った。成績低迷者に面談を行い学習状況を聞き、講義や個別指導など支援を行った。 ・外部講師に依頼し国家試験対策講座を行った｡模擬試験は 13 回実施した。 ・昨年度退学者０名、今年度は４名であった。 ・カリキュラム満足度調査の中間評価から教員が相談しやすい存在ではないと回答した学生が多数いた。教員間で結果を共有し学生への態度を見直した。また、話しかけやすい環境を整備した。 ・実習評価は実習記録を教員会議で共有し評価基準をそろえることで教育の質の向上に努めた。 ・学生の精神面の支援は担任以外の教員も窓口となり支援体制を整えた。成績低迷者や学習環境が整わない学生に対しては保護者も交えて面談した。 ・６月、９月にﾎｰﾑｶﾐﾝｸﾞﾃﾞｲを実施し、６月 21 名、９月 13 名が参加した。個別で悩みを教員に相談したり、卒業生同士で情報交換を行った。いつでも学校に相談に来てよいことを伝えた。 ・今年度同窓会の協力を得て卒業生に対し動向調査を行った。	・クラスごとに国家試験対策を行い学生、教員とも競合意識をもって取り組んでいることは画期的である。少人数制で個別性をふまえた関わりが行われており、クラス担任とそれ以外の教員の連携がうまく取れていたことで、効果的な対策になったと推察する。 ・退学者は４名いるが、学校運営目標より「最後まで支援し、やむを得ない場合、適職への進路変更を支援する」という内容と実際を鑑みると十分な対応であった。

Ⅴ．学生支援 （小項目10項目）	評価 3.5	評価 3.8
	・学費の支払いが難しい学生に対し運営会議で検討し支払いの延期を行った。 ・健康管理規定に基づき年1回4月に健康診断を実施した。昨年度まではインフルエンザ予防接種時に医師の立ち合いはなかったが、今年度は健康管理医立会いのもと希望者に実施した。また他医療機関で実施した者の接種状況を確認した。 ・看護の日の活動、椿森祭、クリスマスカードの配布などを行い、地域の方や患者との交流を図った。国家試験の学習や実習に支障がないように自治会活動の時間は計画的に行った。1学年での活動のため学生の負担が少なくなるように規模を縮小した。 ・教室は少ない学生で効率的に清掃が行えるよう使用頻度に合わせた清掃計画を立案し実施した。使用頻度が減少した実習室のシンクから悪臭がするようになったが、定期的に水を流すよう対策をとり、悪臭は軽減した。 ・年2回保護者会を実施した。年間予定、カリキュラム、国家試験対策などを説明した。保護者会の後には希望者や要支援学習者の保護者と個別面談を実施し、学生の課題を共通認識し家庭での学習支援を依頼した。成績低迷者には12月末、2月に面談や電話連絡を行い学習支援について協力をお願いした。	・学生数が少ない中で同窓会会員などの協力を得ながら、積極的に地域とも交流を行うことで学生が成長できる機会を確保している。 ・設備・備品の経年劣化はあるが、閉校準備を進める中で使用頻度や優先順位などを検討し可能な限り適切に対応されている。 ・3年次に保護者会を行ったことで保護者の認識や家庭での支援状況を実際に知る機会にもなり、学習計画の目標を共有しながら、保護者と連携して支援できる環境づくりに繋がった。 ・閉校による影響もあるが、取り組みに向けた提案や適切な部署への相談は行われている。
Ⅵ．教育環境 （小項目3項目）	評価 3.6	評価 3.6
	・新カリキュラムに移行し、実習目標に合わせた学習ができるよう新たに実習施設の調整や依頼を行った。 ・就職が決まっていない学生に関してNHO内の施設へのインターンシップを紹介し就職先とのマッチングを行った。 ・災害時マニュアル、アクションカードが存在しているが見直しがされていないため現状に即していない。災害時の状況把握はGoogleフォームを活用して安否を確認している。教員が災害時にSNSで連絡が取れる体制を整えた。	・災害時マニュアル、アクションカードについては見直しがされていない現状であったが、定期的な防災訓練や災害時の備蓄については適切に行われている。
Ⅶ．学生の受け入れ募集 （小項目3項目） ※学納金は妥当なものとなっているか	評価 4.0	評価 4.0
	・学納金は5年間値上げをしていない。学費のほかに環境整備費、実習費を請求している。実習中に使用するファイルやマスク、手指消毒剤を準備した。 ・情報科学室パソコン用のコピー用紙も必要時に使用できるように準備した。	・学生募集活動は行われていないが、学校生活の記事は月1回以上更新されている。HP内の閲覧数について集計されており広報活動の評価を行う体制は整っている。
Ⅷ．財務 （小項目4項目）	評価 3.5	評価 3.5
	・経費削減対策､節電を行っている。 ・令和6年度卒業生は、就職者数に対し県内就職率95.5%県内就職率となった。 ・教材・教具はできるだけ閉校まで使用できるように丁寧に使用している。	・県内就職率は令和5年度に続き、令和6年度も高い水準を保つ努力をしており、実績になっている。 ・支出を抑え、適正な収支となる努力がされている。
Ⅸ．法令等の遵守 （小項目5項目）	評価 3.8	評価 3.8
	・千葉医療センター個人情報取り扱いの規定に則った申請書を実習クールごとに提出し、実習記録の持ち帰りを許可している。学生個人の識別は実習専用の番号を使用している。 ・HPに自己評価結果、学校間評価結果、学校関係者評価結果を公開している。高等教育の修学支援新制度については一部資料の公開が遅れていたが、2月中旬には公開した。	・遅れている資料の公開に期待する。
Ⅹ．社会貢献・地域貢献 （小項目3項目）	評価 4.0	評価 4.0
	・看護の日に自治会の地域奉仕活動を行った。 ・学校施設をNHO職員や同窓生に貸し出した。また図書室は千葉県内NHO4施設の職員が利用した。 ・ペットボトルキャップを収集し、ユニセフに10.2kg寄付、椿森祭でのバザー収益9,710円を日本赤十字社に寄付した。 ・教員2名はアドバイザーとしてNHO主催の実習指導者講習会に参加した。1名は新人教員研修講師、学校評価委員、医療編集者、看護師確保対策委員を務めた。 ・椿森祭開催時に教員7名が公開講座を行い延べ126名が聴講した。 ・NHO外の看護学校の教員インターンシップ（計2回4名）を受け入れた。	・1学年しかいない中、学内にとどまらず地域の活動に貢献していることが評価できる。この活動は地域貢献のみならず、豊かな人間性の育成にもつながる点が評価できる。 ・積極的かつ活発な活動が行われている。

２．学校間評価総評（最終評価）

１．国家試験合格率 100%

5 人担任制をとり国家試験対策を 3 クラスに分けたことで、学生の状況に応じた細やかな支援が行われていた。モチベーションを維持し、学習の波に乗れないような学生を出さない関わりが行われていたことがうかがわれ、学校全体での支援が評価できる。

２．卒業率 98.7%

原級留置ができない状況の中、個別的な課題を見出して改善策を実施し、単位修得につなげる支援が行われていた。適職への進路変更に至る過程も細やかに対応されている。卒業率 98.7%という高水準結果は、これらの細やかな関わりの成果である。

３．教育内容の質の向上

閉校になる状況下においても、前年通りの対応ではなく、社会の動向とニーズに応じた実践教育に尽力している。新たな実習場を開拓したこと、新規の実習受け入れや学習形態の変更に戸惑う臨床への対応を工夫してタイムリーに実施されたことは教育の質の担保につながる。また、これらは学生の看護実践能力の育成に効果的なだけでなく、教員の実習調整能力の向上にもつながるといえる。

実習では、NANDA-Ⅰの講習会を全教員が受講し、さらに臨床で学習会を実施したことで学校・臨床の指導の一貫性も高められている。また実習ごとに技術到達度を集計し、学生が課題をもって次の実習に取り組めている。国家試験終了後の卒業間際まで技術演習を行うことで、学生は自信をもって臨床に向かうことができ、領域担当としての責任を十分に果たしている。

教課外活動においても、閉校年度である事で何かを取りやめたりすることなく、常に課題に柔軟に対応されていた。地域活動や学校行事も活発であり、これらは学生の協調性を育み、教育目標にある豊かな人間性の育成にもつながるといえる。

４．教員の教育力・管理能力の向上

研究授業による教育力向上のための取り組みや、学会参加、研究活動などの自己研鑽によるスキルアップが計画的に行われていた。学生指導と閉校準備と進行しながら、個々の成長のための取り組みが行われていた。

５．学生支援の強化

外部の協力を得ることで、1 学年しかいない中でも、学生が協力しながらそれぞれの役割を発揮する機会を確保することができている。また地域との積極的な交流は、これから社会に出る学生の人としての成長につながる。

NHO 就職率は前年度より低下しているが、県内 NHO 病院の奨学金制度や家庭の事情をふまえた社会人学生の背景を鑑みるとやむを得ない状況もある。また、2 年次の母性看護学演習の講師が良きロールモデルとなり、進学者が 5 名決定したことは支援の成果であるといえる。

1 学年のみの編成で、学生のカリキュラム評価によると教課外活動に対する負担感についての意見はあるようだが、教員がフォローしてモチベーションを維持し、学校全体で楽しんで取り組んでいた様子がうかがえる。教員と学生が一致団結しており、これから就職する学生にとってはチームの一員であることを意識づけられる支援が行われていた。

横浜医療センター附属横浜看護学校

教育主事　菅山　明子

３．学校関係者評価会議総評（最終評価）

１．国家試験合格率 100%

本年度の国家試験合格率100%を達成するため、5人担任制や実習を活用した対策、保護者との連携強化など、多面的な取り組みが行われ、学生一人ひとりに合わせた支援を強化し、国家試験合格に向けた体制を整えたことは高く評価される。

２．卒業率 98.7%

卒業率 98.7%という目標に対し、単位修得が難しい学生への支援が継続的に行われ、実習状況の共有や個別指導の強化、実習室での課題克服演習など、学生一人ひとりに寄り添った対応が評価される。適職への進路支援も適切に行われた。

３．教育内容の質の向上

閉校年度でありながら、質の高い教育を維持するために尽力し、専門性を活かした外部講師の招聘や実習での工夫があった。

４．教員の教育力・管理能力の向上千葉医療保健大学 三枝 香代子

研究授業や学習会を通じて、教員の教育力・管理能力が向上しました。実習指導に重点を置いた研究授業とその後のディスカッションは有意義であり、教育・研究両面で教員の資質向上が図られた。

５．学生支援の強化

キャリア支援や進学・就職支援が計画的に実施され、県内就職率・NHO 就職率は基準を維持しました。助産学校への進学者数が例年を上回る成果を上げ、学生支援の強化が評価される。

６．閉校までの関係各所との連携

閉校に向けた関係各所との連携が順調に進みました。地域との協力では、看護の日のイベントや健康診査を通じて地域住民・企業とのつながりを維持・強化。同窓会との連携も円滑に行われた。

７．学校経営基盤の安定化

経費削減が効果的に実施され、収益・運営費の見直しが行われました。収益は減少しましたが、運営費の削減が進み、収支差額において一定の成果を上げた。

８．いきいき働ける職場づくりの推進

職場内での声掛けや尊重の風土が育まれ、職員間の協力体制が強化された。実習担当時の情報交換や職員家族への支援を通じて、職場全体の絆が深まり、協力的な環境が確立されていることが評価される。

千葉医療保健大学

三枝　香代子